

〇〇してみました世界のフィールド

バグパイプを奏でる

いんとう みちこ
印東 道子
民博 人類文明誌研究部



調査・研究に没頭していた大学院生時代、バグパイプにあこがれたわたしは思い切って地元のパイプバンドに入門を願い出た。さまざまな場所で演奏する機会をえて充実した日々を送ったニュージーランドでの留學生活の思い出を振り返る。



バグパイプ奏者に先導されるオタゴ大学の卒業生（筆者所有、1983年）

★
ニュージーランド、
ダニーデン

ニュージーランド南島にあるダニーデンは、スコットランドからの移民によって開拓された都市。その中心にあるオタゴ大学大学院で七年ほど研究生生活を送った。今から三〇年以上前のことだ。留學一年後の修士号授与式で出会ったのがバグパイプだった。ガウンをまとった卒業生の二団はバグパイプ奏者に先導され、メインストリートに公会堂まで行進する。先頭付近を歩いてきたわたしは、そのスコットランド的なサウンドに魅了され、いつの日か自分で演奏したいと感じた。

ところが、発掘調査や博士論文執筆などで五年が忙しく過ぎてしまい、帰国が迫ってきた。チャンスは待つては来ないと悟り、市内で評価の高いダニーデン・ハイランド・パイプバンドを訪ねた。「二年後には帰国するけれどバグパイプを習いたい」と頼んでみた。どこから見てもスコットランド系には見えない女性の方がまな願いに、「通常はバグパイプを演奏できるまでに一年半はかかる」という返事。それでもよいからと、ともかく毎週一回、バンドメンバーにレッスンしてもらったことになった。

猛練習の日々

まずは、練習用チャンター（リードをもつ縦笛）で指使いを習うが、Gからはじまる九音しかない。これら以外に半音を出すこともできない。すぐに楽譜を見て指が自然に動くようになったので楽勝かと思いきや、音符と音符のあいだになんやら細かい装飾音符（グレースノート）が付いている。これがくせもので、メロディの合間にすばやく指を動かして細かい音をはさむのは難しい。

一緒に習っていたのは一〇歳ぐらいの男の子。楽譜を見るのも初めての彼にはすぐに追いついた。マーチの他、ジグやリールといったスコットランドのフォークダンス曲を、練習用とはいえチャンターで演奏するのが楽しく、人類学科の実験室や標本室などで毎日練習して曲を見ていった。

三カ月が経ったところで、ジュニアバンドの練習に参加することを許され、コンテスト用の曲も一緒に練習するようになった。しかしまだ実際のバグパイプでの演奏は許されず、練習用チャンターでの練習が続いた。四カ月目にバンド所有のバグパイプを貸与され、初めてそれを演奏したときに、なぜ暗譜するまで演奏を許されないのかが理解できた。

バグパイプの原理は、息をバッグ（革袋）のなかに吹き込んで溜め、肘でバッグを少しづつ脇に押し付けることで、空気を三本のドローンパイプとメロディを演奏するチャンターへ送り込む。これによって息継ぎするあいだも音は途切れることがない。しかし大量の息を吹き込みつつ一定量の空気をバッグから押し出し、なおかつメロディ演奏を同時にするのは慣れでも大変なことで、暗譜しておかなくてはとても演奏などできない。

デビューを果たす

猛練習をした結果、正式にジュニアバンドのメンバーになり（上達するとシニアバンドにあがる）、地方大会や全国大会にも参加した。バンドのユニフォームはもちろんキルトで、メンバーに貸し出される。バグパイプの



上：市祭パレードで演奏する筆者（D.Anson 撮影、1988年）
下：所属バンド年間優秀賞トロフィーと個人コンテスト優勝の盾

音色は決して美しいとはいえず、チャルメラのようであるが、ドローンパイプから出る通奏低音と調和させて演奏すると厚みのある音になるのが不思議だ。

ダニーデン最古のこのパイプバンドが設立されたのは一八九八年にさかのぼる。現在でも市のさまざまな催しでバグパイプが演奏され、スコットランド色が濃い。市祭でのパレードはもちろん、老人ホームでの慰問演奏、恵まれない子どもたちを招待した演奏会、市の中心広場や植物園での週末演奏など、それまで過した大学での生活とはまったく異なる経験をすることができた。バグパイプは全国的に盛んで、個人のコンテストも各地で開催され、全国統一基準で審査される。ある大会でわたしも優勝し、所属バンドからも年間優秀賞をいただいた。

結局、一八カ月が過ぎたところで帰国することになったが、その直前におこなわれた市祭のパレードでは、パイプメジャー（パイプ奏者のリーダー）の定位置である先頭で演奏させてくれ、わたしのバグパイプ漬けの日々は終わった。